



## 京セラ

### 「ローカル5G／IoT活用展」で 5G対応デバイスなどをデモ展示

京セラは「第6回 通信・放送 Week」を構成する5つの展示会の1つ、「第1回 ローカル5G／IoT活用展」に出展する（ブース番号：2-11）。展示内容の中心は、導入実績を伸ばしている5G対応デバイス「K5G-C-100A」だ。

「K5G-C-100A」は、IoT機器や監視カメラ、ドローン、ロボット、AR・VR機器、ディスプレイなどユーザーのさまざまなエッジデバイスを有線・無線で接続し、ローカル5Gやパブリック5Gで伝送できる。製品の最大の特長は、内蔵空冷ファンによる排熱で安定した高速通信を可能にしたこと。これは同製品がユーザーから最も評価されている点だ。また、モバイルルーターとは異なる本格的なルーター機能を持ち、5Gルーターとしてカメラや産業機器のデータを高速伝送するという使い方に対応している。それだけでなく、映像を圧縮して伝送したりエッジ処理を行うAndroid OS対応のエッジコンピューティングとしての使い方も可能だ。「JAPAN MADE」で、商品企画から設計、製造、アフターサポートまで一貫通貫して京セラが行っているのも安心できる。

一度導入すれば、ソフトウェアのバージョンアップにより機能拡張されていく。例えば、今年3月にはB39 (sXGP) の周波数帯への対応、ローカル5Gの



京セラの5G対応デバイス  
「K5G-C-100A」

Sub 6のアップリンクをMIMO (2×2) に対応さ

せり速度を倍増、ローカル5Gの準同期もサポートして上り速度を向上させる、といったバージョンアップを実施。機能も大幅に向上させた。このほか、NV12やYUYVなどのフォーマットの追加、音声配信と複数台カメラの映像配信への対応、映像伝送での遅延バッファ設定を可能にして複数箇所から伝送されてきた入力データを同期させる機能の追加、映像伝送プロトコルSRTのパスフレーズ対応による受信側の認証の効率化など、映像業界からの要望に応えた映像伝送機能の拡張も頻繁に行っている。今後も大きなバージョンアップを計画している。

「K5G-C-100A」の導入事例が増えている。NTT東日本の企業向けマネージド・ローカル5Gサービス「ギガらく5G」の端末として接続検証。IoT用途では、自動走行ロボット (AGV) でプラントや工場、倉庫などを自動巡回点検するブルーイノベーションのソリューション「BEP サーベイランス」に採用された。ケーブルテレビ事業者のケーブルメディアアワイワイ (宮崎県) は、ドローンで撮影した観光スポットの360度カメラ映像を観光客のスマホやタブレットに配信する実証検証に活用。ミハル通信は8K映像を商用5Gで伝送する実証実験に使用し、世界最高水準の低遅延を達成した。朋栄は映像伝送用デバイスとして、その他の映像機器と組み合わせて提供している。

今回の展示ブースでは、「K5G-C-100A」を使って4K映像を5G伝送してディスプレイに表示するというデモも行う。このほか、IoT用デバイスの新製品としてLTE Category 4搭載多機能ゲートウェイ「KC4-C-100A」も展示する。京セラの展示は、「第1回 ローカル5G／IoT活用展」の中でも注目したい内容だ。

